



星野 柚奏 (ほしの ゆうか) 川口中 2年生

作品名:「夢をかなえるゾウ」

図 書:夢をかなえるゾウ

「よし! やってみよう!」と、読み終えて感じた本は初めてだった。主人公は普通のサラリーマン。何でも三日坊主で終わってしまい、自信をだんだんと失っていた。そしていつか「変わりたい」という思いも、「どうせ変わらない」という思いが強くなっている。そんな時、象の姿をした神様・ガネーシャが主人公の前に現れ、「一日」で必ず実行できる「課題」を出題する。

ふと、読んでいて、私は主人公と似ていることが多くあった。三日坊主で終わる、きっかけさえあれば変わりたいと思っている、物を大事にしない…などと、自分のことを言っているのではないかと思うほど共通点があった。そのおかげか、主人公になった気持ちでこの本を読むことができ、深く考えられた。

まず、一つ目の課題「靴をみがく」。革靴を履くことはないので、普段履いている靴を洗ってみることにした。2ヵ月に一度洗うくらいなので、念入りに洗ってみると意外に気持ちが悪くなった。真っ黒から真っ白に変わった靴は新品のようで、大切に使おうという気持ちが出てきた。靴をきれいにすると、不思議とピシッとひきしまった気がして、これから靴みがきの課題が楽しみになる。

次に、二つ目の課題「コンビニでお釣りを募金する」。神社へ参拝に行ったときでさえ、母の十円玉を入れる私にとっては、少し考えてしまう課題だ。お釣りすべてを募金しろということではないと思うが、なんだか良い人ぶっている感じもしなくはない。それにやっぱりケチな自分がある。私と似ている主人公だったらどうしたか? もう一度読み返して、私は本当に主人公そっくりだと思った。私達のような人間は、三流だそうで、良いことをするのに後ろめたさなんて必要ない。このガネーシャの言葉が心に残った。私はなにを良い人ぶっていると思ったのだろう。次の日の塾の帰り、初めて自分のお釣りを募金してみた。すると、なんだか清々しい気持ちになって、また募金してみたいなと思った。でもまだ恥ずかしさのようなものがなくはない。これがなくなったときには、二流になっているのかなと思うと、期待してしまう。

その次の課題は、「トイレを掃除する」。これは他の本でも、いわれていることなので、良いのではと思い、母の仕事を先にやってみた。母が掃除していたため、ほとんどきれいではないかと思っていたが、トイレの周りも掃除していると汚れていた。すみの方まで掃除すると、思いの外時間がかかり、母の大変さが分かった。そ

して、きれいなトイレだときれいに使おうという気持ちになる。これからトイレ掃除は私が進んでやり、家の外でもきれいに使おうと思う。だが、私の後、弟が入って出てくると、トイレトーパーがちらばっていて少し嫌だったので今度掃除を頼んでみようと思う。

次の課題は、「身近にいる一番大切な人を喜ばせる」。私にとっての身近で大切な人は両親だ。朝から夜まで仕事なのに、家のことをやってくれたり、話もきいてくれる。感謝することはたくさんあるのに、私からは何もしていないと思った。でも、直接「ありがとう」と言ったりするのははずかしかったので、自分にできる仕事から始めていった。そうしたら、母が帰って来て喜んでくれて、うれしかった。近くにいてくれるから、ありがたさを見逃してしまうのかもしれない。でも、その感謝の気持ちを忘れず、喜ばせられることを忘れないようにしようと思う。

続いての課題は、「お参りに行く」。ちょうどお盆がすぐだったのでそのときお墓参りに行くことにした。神社やお墓参りには年に一度行くくらいで、頼みごとがあっても行くことはない。だから、行っても何をすれば良いのか分からなかったが、ガネーシャの裏技のとおり「神様いつもありがとうございます」と言ってみた。これだけで良いのかとも思ったが、感謝は大切だと分かったので、これからやってみようと思う。

そして、最後の課題は「毎日、感謝する」。課題を実行している内に、感謝は大切だと学んだが、毎日感謝するのはよく分からなかった。だが、ページを進めていくほど、私は感謝することの何も分かっていないと思った。お金も、地位も、座っている椅子もシャープペンも、当たり前にあるけど、本当は有難いもの。私が生きていくのに必要なすべてが、誰かががんばってくれたおかげ。このことを忘れずに私はありがとう、幸せですと感謝する。

計二十九の課題。二十九日でやり遂げたが毎日とても課題を実行するのが楽しかった。最初はもうやめようかとも思ったが、だんだん前の自分とは少しずつ違ってきているのではと感じるようになった。知っているだけで実行しないのでは変わらない。忘れないようにする。